

人間学科共通科目「人間学」特別講演

地球時代の哲学 —池田大作先生の理念と行動—

佐 藤 優

日時：2014年7月10日（木）午前9時

会場：S201 教室

〔講演〕

仏教思想・創価学会との出会い

ただいま紹介にあずかりました、佐藤優です。私の話は1時間程度にして、極力双方向性を担保しましょう。ですから、遠慮なく意見や質問などを聞かせてください。さて、私は「佐藤先生」と紹介されることがありますが、「先生」と呼ばれるとぞっとするんです。みなさん、私のようになっては絶対に駄目だということですよ。

東京拘置所というところがあります。ここは、殺人などをやらない限り普通の犯罪では行かないところです。あるいは詐欺ならば、億以上の単位の詐欺ではないと行きません。ところが、東京地検特捜部というところに捕まると、警察に捕まることなく東京拘置所に入れられます。

もう大学生のみなさんはほとんど覚えていないでしょうが、12年前に「鈴木宗男事件」という大事件がありました。おそらく、みなさんのお母さんやお父さんの記憶には「鈴木宗男とかいう、とんでもない奴がいるぞ」という

(2)

印象で残っているでしょう。この事件が起こったときに私も連坐して捕まって、512日間、この東京拘置所に入りました。結構、食べ物には美味しかったです (笑)。

しかし、両隣は死刑囚で、さらに私の場合特に悪い被疑者だと位置づけられていました。接見等禁止措置がとられたので、親にも会うことができず、文通もできない。ずっと一人で座っていなければなりません。ただ拘置所の中は、様々な本を読んで何かを考える場合、とてもいい場所だと思います。戸田城聖2代会長も仏法の真髄に触れたのは獄中でした。獄中は、読書には良い場所なのです。

「今日、佐藤とかいう人に会って話を聞いた」とお母さんに報告すると、心配されるかもしれません。「なんだ、創価大学は最近どうしているんだ?」「なんか犯罪者を呼んでいるらしいな」と (笑)。あるいは、「六師外道の外側のキリスト教徒じゃないか」とか「こんな奴らに話をさせて大丈夫なのか?」と心配になる、熱心な創価学会のお母さんやお父さんもいらっしゃるかもしれません。ただ、私は同志社大学の神学部在籍していたとき、3年間仏教の勉強をしました。1年目はアビダルマ——阿毘達磨俱舍論です。2年目は中観、3年目は唯識で、私にはアビダルマが一番おもしろかったです。

仏教の縁起観というのは、非常に勉強になりました。様々な業 (カルマ) によって現在の我々の状況があり、それは抜け出せない状況ではありますが、状況を変えていけば新しい時代、新しい関係を作ることができる。ここを見ると、大きな希望の原理になります。人間学という人間の洞察において、仏教というのは深い。特に創価学会の母体となっている日蓮仏法は実に深いです。

同志社大学に宗教学という授業があります。その授業で扱われるのが、京都大学を出た幸日出男先生が書いた本です。この方はクリスチャンですが、牧師ではありません。キリスト教の用語では平信徒と言います。その方の授業で扱ったのが、「戦時下における創価教育学会の抵抗」——牧口先生や戸

田先生についてのことなのです。キリスト教のほとんどの指導者が戦争体制に迎合してしまうのに対して、なぜ創価学会があれほどはっきりと戦えたのかということ、我々の授業ではやりました。そのときに、私たちは創価学会よりも創価教育学会の歴史を勉強しました。ここに日本の本当に強い宗教団体があるのだと。

しかし、日本の宗教に詳しい方々なら知っているでしょうが、戦時中に激しい弾圧を受けたもう一つの宗教団体で、京都の「大本」という団体があります。お父さんやお母さん、いえ、お爺ちゃんの世代でしょうか。高橋和巳という作家の『邪宗門』という作品があるのですけれどね。私の大学時代の先生は、大本への弾圧と創価教育学会への弾圧は本質的に違うと言うのです。大本が弾圧を受けたのは国家権力に近づきすぎたから。それに対して創価教育学会への弾圧は、当時の国家神道に対して「宗教と国家は違う」という考えを持っていたために行われたのだと。つまり創価教育学会は、宗教は個人でやるものでも国家でやるものでもなく、自発的に集まってきた人たちによる中間団体として行われるものだという、宗教の原点を持っていたから弾圧されたわけで、我々が学ぶべきは創価教育学会だと教わったのです。

私は1960年に東京の病院で生まれましたが、家は埼玉県の大宮というところで、そこで育ちました。大宮には武蔵国一宮氷川神社があって、幼稚園や小学校の遠足でその氷川神社に行きました。私の母親は、「鳥居はくぐってもいいけど、神社で二礼二拍一礼はするな」と言うわけです。「みんなに合わせて軽く頭を下げるくらいならいい。ただお前の小遣いは神社に渡すためにやっているわけじゃないから、賽銭は絶対にやるな」と厳しく教わりました。一方で、必ずクラスにあと二人くらい、鳥居も通らなければ神社で絶対に頭を下げる子供たちがいる。その子たちは「鳥居の下、通ると頭が割れるんだよ」とか言っていてね(笑)。あるいは夏休みに、私の母親は「祭りでお菓子はもらってもいいけれど、神輿を担いだらいけない」と言う。あの神輿にキリスト教の神様はいないから、というわけです。そうすると、やはり他にも神輿も担がない子供たちがいるのです(笑)。そういう

(4)

人が、みなさんのお父さんお母さん世代の創価学会員です。もうみなさんの世代にはそういうイメージはないと思いますけれど。

ですから、キリスト教や創価学会の人たちは、家の中での宗教感覚と、学校や世間一般とでは少し違うなという雰囲気を持っていました。ちなみに現在のキリスト教では、地域共同体の営みは重要で、中に変な神様が入っていないのであれば慣習に従ってお神輿担いでもいいですよ、という風になっています。創価学会のほうでもそうなっているのではないのでしょうか。

大学とは総合知を学ぶところ

さて、大学は入って得する大学と、入ってあまり得しない大学があります。おべっかを言うわけではありませんが、創価大学は先生たちが本気で教育をしていますから、入るととても得をする大学です。だからこそ、ときに厳しいこともあります。

私は数年前まで、ある名門私立大学でお手伝いをしていて、第1回目の授業では必ず試験を行っていました。使用したのは山川出版社の『詳説世界史B』です。これは大学受験で一般的に使われている世界史の教科書ですね。その中から100個、例えば「広島への原爆投下」「ウェストファリア条約」「ソ連崩壊」「二・二六事件」といった事項を取り出します。どれも基本的な事項だと思います。しかし、広島への原爆投下が2006年だとか、二・二六事件が1954年とか、恐ろしい答案を山ほど見せられました。今ここで行っても、残念ながら似たような結果になる危険性があります。どうしてだと思いますか？このような結果になってしまう理由は2つあります。

まず1つ目、みんな受験勉強が嫌いなんですね。ですから、創価大学に入学する場合には、「やっぱり自分は学会員っていうバックグラウンドがあるし、お父さん、お母さんも喜ぶ」とか、あるいは「学園の人たちと一緒に行きたい」とか、そういった動機が強いのではないかと思います。これらは、「この大学に行きたい」という比較的強い動機ですのでとても良い。しかし、圧

倒的の大多数の現代の学生は、大学受験をする時点の自分の偏差値で入る中で、一番偏差値の高いところに行きたいと考えます。ですから、早稲田の政経などと言うと「私立で一番偏差値が高いし、数学が要らないから行こうか」といった動機で入ってしまう。政治や経済に関心があって政経学部に来たわけではないのです。それだから、受験勉強を嫌々やることになってしまっていた。

また、2つ目の原因は受験勉強が役に立たないと考えていることです。人間は嫌いで役に立たないと思っていることは、絶対に記憶には定着しません。受験勉強で覚えさせられることが嫌いなのは、私も同じです。

となると「これは必要なんだ」という動機付けがとて重要になります。例えば、この中には将来、外交官になって国際的に活躍したいと考えている人もいるかもしれません。あるいは、平和学の分野で頑張りたい、世界に現実的に平和を作りたいと思って、イギリスで本格的に平和学を勉強したいという人もいるかもしれない。その人たちが「1648年が、ウェストファリア条約が結ばれた年である」とか「それによって三十年戦争が終わった」といったことを知らないと、近代の国民国家や平和がどのように作り上げられてきたのかわからないということになります。ですから、ある種の受験勉強はかなり重要なのです。

この話を聞いて「まずい、私は受験のときのこと、もう忘れてる」とか「僕、日本史受験だから世界史に自信ない」という人がいるかもしれません。それならば、ここで力の欠損を補強する方法をお伝えしましょう。まず、捨てていないのであれば、受験のときに使った学習参考書と教科書を出して、それと山川出版の標準的な問題集1冊を買っておきましょう。加えてもう1つ、1カ月980円かかりますが、リクルートが運営している『受験サプリ』というインターネット予備校があります。これらは数学や英語などの補習に役に立ちますし、どれだけ聴いても980円で教科書も無料でダウンロードできますから、それで自分が苦手な分野を補強すればいいのです。私は大人のビジネスパーソンにも、この受験サプリを薦めていて、商社員や官僚にも役に立

(6)

ちます。こういったインターネットツールを有効に使うことで、現在の力の欠損を埋めておくことが重要です。

私のように50代になると、日本の大抵の大学ならば、今から受験しても合格するでしょう。それは、問題を作る側くらいの世代になると要領が良くなるからであり、どういった勉強をすれば合格するのかということをよく理解しているからです。私が絶対に合格できないのは日本体育大学です(笑)。それから東京芸術大学。ここは学力とは別の能力が必要になりますから。あと、強いて言うならば東京大学の理科三類でしょう。これは特に記憶力が良くて、その再現が速い人でないとなかなか合格することができません。それ以外の大学であれば合格法はあるんですね。つまり、裏返して言うと、大学の偏差値を一生引きずっているようではロクな大人になりません。私など偏差値がついてない大学の出身ですからね。

重要なことはその大学に入ってから、何をどうやって勉強するかということです。みなさんの大学の創立者である池田大作先生はどのような大学を卒業しましたか? 戸田城聖大学ですよ。バラの花を1本、「よく勉強したね」といただいて卒業したのです。

池田先生の著書は、現在、『池田大作全集』(聖教新聞社、1988～)で150巻までの計画ができていて、144巻までは既に出版されています(講演当日時点)。中には学術的に非常に高く評価されている内容も含まれている。このような著書を出すことができるのは、池田先生が本当の意味での知識を体得しているからであり、本当の学問を体得しているからです。中世の格言で「博識に対立する総合知」という言葉があります。それはどういうことかと言うと、生死に関係のない、生命体としての活動に役立たないような知識というのは、いくら細かく学んだとしてもそれほど意味がない、ということです。そう見ると、ネットの真実のようですね。

みなさんは「創価学会ってやっぱりすごく悪い団体らしい」といった、ネットに色々と書いてあることを周りから言われるかもしれません。しかし、そのような断片的な情報ではなくて、筋の通った総合的な体系知が必要です。

これは人間力をつけることになります。

池田先生の民間外交の真実

ここで、私自身がモスクワで体験したことを紹介しましょう。1990年7月25日、この日、桜内義雄衆議院議長をトップとする日本の国会の代表団がモスクワにやって来ました。その時の代表団の目的は、翌年の春にゴルバチョフソ連共産党書記長兼ソ連大統領を日本に招くことでした。そのために、官僚たちはモスクワを訪れる前に仕込みをしていました。「サクラの季節にどうぞ来てください」と伝えればゴルバチョフは受け入れる、そういった形に事前準備をしていたのです。

ところが、外務省にある情報が入ってきました。桜内さんが「北方領土の事をゴルバチョフに言うのを悪くするのではないかと心配で、何も言いたくない」と言ってきたのです。ですから外務省は「北方領土の件、言わないと大変なことになりますよ」とネジを巻きました。そうしたら、ネジを巻きすぎてしまった。桜内さんはゴルバチョフに会っていきなり「北方領土の問題をまず解決しろ!」と言ってしまった。するとゴルバチョフは「話はそれしかないのか?我々は、その島を南方領土と言うことができるんだ。そんな話しか出てこないなら行かないほうがいいな」と言って会談が終わってしまったのです。時計を確認すると10分しか経っていません。通訳の分の時間を除くと、実際に会談したのは5分ほどでしょう。そう考えると、片方の発言は2分30秒です。こんな短時間で決裂してしまったわけですね。新聞発表では30分と誤魔化していましたが、本当は実質的なやりとりが5分程度の険悪な会談でした。

困ったのは外務省です。ゴルバチョフが来日しなければ、北方領土も何も動かないのですから。すると、会談のすぐ後の27日に池田先生がモスクワを訪問してゴルバチョフと会う予定になっていました。そこで外務省は池田先生に「日本の国益のためにも、ゴルバチョフさんが日本に来られないと困

(8)

るんです」と願ひ出ました。それに対して池田先生は「私は文化人としての交流でモスクワに来ているんですよ。これは政治のど真ん中の話じゃないですか?」と返しました。それでも、池田先生は「日本のためにやろう」と言ってくれた。ただ、「そのかわり、外務省の言ったとおりににはやらないよ」と付け加えたのです。この辺りが、池田先生らしいですね。

そして、ゴルバチョフに「サクラの春か、モミジの秋に日本に来てください」と伝えると、「喜んで行きます」という話になりました。その場もとても和気藹々とした会談になったのです。これは、やはり相手の心を掴む力が決め手になったと言えるでしょう。日本の要求だけをする事は誰にでもできます。ゴルバチョフの立場を考えながら交渉する、池田民間外交の勝利となったわけです。結果、翌年にゴルバチョフは日本へとやって来て、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の4島の名前を出して、それが係争地であることを認めました。これによって、北方領土交渉の位相が飛躍的に変化したのです。

ところが、この記録は外務省のどこにも残っていません。それを私は知っています。大使が記録に残すな、と指示したからです。外務省はこの事実を無かったことにしている。外務省が、民間人であり、宗教人であり、文化人である一人の人に、このような外交の重要問題を任せたとのことになってはきまりが悪いのです。官僚というのは成績だけはいいので、きまりの悪いことというのはとても嫌いなのですね。ですから、このように隠してしまう。私も御縁があって東京拘置所の御厄介にならなければ、たぶんこのことは話さなかったでしょう。しかし、出てきたついでなので、知っていることを国民のためにお話ししておこうと思ったのです(笑)。

このことは雑誌にも書きました。最初に私が書いたのは『新潮45』という雑誌でした。新潮社と聞くと、創大生のみなさんのお父さんやお母さんの顔はきっと曲がってしまうでしょう。創価学会にとって一番の友人ではない出版社です。それなのに、なぜ私が「池田先生が頑張った」という話をその出版社で書いたのか。おべっかを言っているわけではないということを、最も確実に証明するにはどうすればいいか。もし、新潮社の媒体から出ていけば、

池田先生や創価学会の良いことを言うわけがないと、読者は思うはずですが。だからこそ、信憑性が増すでしょう？ですから、わざと『新潮45』に書きました。もちろん、書き方は考えました。「日本外交が池田大作氏に依存した瞬間」と、こういう書き方をすればいいわけです。

すると、しばらく経って、『潮』の編集部から私が新しく出した本に対してインタビューを取りたいという申し出がありました。私は「私の話なんてつまらない。私知っている池田先生について話したい」と答えました。それが「池田SGI会長の民間外交」という形になったのです。しかし、記事になった後に方々から電話やメールが来ました。「今後、『潮』に出るのはやめたほうがいいのか？」とか「あの団体とは付き合わないほうがいい」といった内容でした。加えて「いくらもらったんだ？」とか「創価学会系のメディアは気を付けたほうがいい。恐ろしく高額な原稿料で身動きが取れなくなるぞ。最初は池田大作氏の悪口だけは書かないでくれ、と頼まれるだけだけれど、その内に創価学会の宣伝塔をやってくれ、という話になる。金でがんじがらめにされて動けなくなるぞ！」といったものもありました。「あなた、原稿料をもらったことがあるんですか？」と聞いてみると、実際にもらったことがある人は1人もいませんでした。

ここだけの話ですが、『潮』の原稿料は『新潮45』や『文藝春秋』より安い(笑)。ただ、これだけは『潮』の名誉のために言っておきますが、『中央公論』や岩波書店の『世界』よりは高い。業界内ではごく標準的な値段なのです。ですから、創価学会が札東で有識者を引っぱたいて世論を誘導しているなどということは大嘘です。

しかし、その瞬間、私にはわかりました。「創価学会タブー」というものがあるのです。それは、創価学会が強いから創価学会の悪口が書けないということではありません。創価学会の悪口であれば、どんなことでも書けるというものです。どんなめちゃくちゃなことでも書けるのです。池田先生の悪口ならば、どんなことでも書くことができる。しかし、創価学会の良いことや池田先生がいかに立派な宗教人なのかということは、一般のマスコミには

(10)

なかなか書くことができません。そういう意味での「創価学会タブー」があります。私はこういうタブーは良くないと思います。だから、『潮』では池田先生について連載をさせてほしいと、私は頼みました。『潮』の編集部もリスクが高かったと思います。私は六師外道の外側の人間ですから。何を書き出すかわかったものではない。それでできたのが、『地球時代の哲学』（潮出版社、2014年）です。

連載の3回目あたりまでは、私には本当のことがわかりませんでした。池田・トインビー対談『二十一世紀への対話』（文藝春秋、1975年）は東西の偉大な哲人の対談だと思っていました。ところが、途中から違うということがわかったのです。この対談で、池田先生の考え方は変わっていません。相当に若い頃から、池田先生の思想は明確な形をなしている。知識の幅が広がり深くなったりはしますが、方向性は変わっていないのです。トインビー博士は考え方がどんどん変わっていきます。これは日蓮仏法で言う折伏と同じです。また、創価学会に入っている方々は、四権分立という言葉を教わるでしょう？司法、立法、行政に合せて「教育」があるのだと。この「教育」によって人間はどんどん変わっていきます。良くもなれば、悪くもなります。池田先生もやはり、本物の教育というものを重視しているのです。

仏教とキリスト教のアナロジー

今、私がこういうことを引き合いに出したのは、キリスト教との類比（アナロジー）のためです。私は、創価学会は大きく変わりつつあると思います。実は、創価学会によって仏教は初めて世界宗教になったのです。こういうことを言うと「でも仏教はキリスト教やイスラム教とともに世界宗教だって教科書にあったよ？」という声が聞こえてきそうです。しかし、宗教分布の地図を見てみてください。どうして、仏教は東アジアと東南アジアの一部地域に留まっているのでしょうか。これは地域限定の世界宗教と言えますね。そうすると今度は「サンフランシスコにも浄土真宗の坊さんはいる」とか、「ブ

ラジルに禅宗のお寺がある」というようなことを言われそうです。ですが、そうしたものは日本人のコミュニティ限定、ディアスポラのための坊さんやお寺です。ですから、広宣流布を日本人から離れて、世界的に行っているのは創価学会が初めてなのです。

イエス・キリストは自分のことをユダヤ教徒だと信じていました。ユダヤ教にも様々なグループ、言ってみれば宗門のようなものがあります。イエスはパリサイという宗門に入っていました。この宗門は、とにかくラビというお坊さんが最も偉くて、ラビたちは一般の信者を「地の民」と呼んで馬鹿にしていました。一般の信者は神について語ってもいけません。さらには、障害を持った人々や重い皮膚病の人々——それがハンセン氏病なのかは議論が分かれるところですが——そうした人々は谷に追いやられて暮らしていました。あるいは、女性の中には自分の体を売らざるを得ないような境遇にある人もいました。そうした人々もラビたちは人間扱いしません。その一方で、イエスという人は普通にそうした人たちと付き合っていました。

しかし、イエスの弟子たちはなかなかユダヤ教と決別することができずにいた。ユダヤ教と完全に決別するのはパウロという人が最初でした。しかし、パウロという人は、最初はキリスト教に反対していたのです。けれども、シリアのダマスカスに行く途中で彼は突然光に打たれて倒れ、幻の中でイエス・キリストと会います。それを機に、彼は心を入れ替えることになったのです。私もよく「佐藤さんは本や論文で池田大作先生を誉めているけれど、直接会ったことはあるの？」と聞かれることがある。もちろん、会ったことはありません。そうすると「会ったことが無くて信用できるの？」と言われる。少し待ってほしい。会えば信用できるという話は、宗教的な感覚からすると全く間違っています。会わずに信じたのがパウロではないか。会う、会わないということが、私の信用の基準ではないのです。池田先生の発言と行動、テキストになったものや創価学会の実際の活動を見て判断しているのです。

パリサイ派と決別してキリスト教は世界的に伝播していきました。そして、

(12)

日蓮正宗という宗門との決別があって、創価学会も SGI として世界的に広まっていきました。ここは、キリスト教と創価学会で非常に似ていると私は思います。

さらに、313年にミラノ勅令という出来事がありました。それによってキリスト教は与党化していくことになります。世界宗教で野党に留まり続けている宗教は一つもありません。世界宗教というのは、常に与党側に回っています。ただし、野党の頃は簡単です。批判だけをしていればいいので、ある意味では綺麗事で済むのです。しかし、与党になると妥協が必要になりますし、綺麗事だけで済ませることができなくなる。それでも、現実的に平和を実現させるためには何が必要になるのでしょうか？創価学会のみなさんの立場から言うと、仏法をどのようにして社会に活かしていくのか。平和を実現させるには多くのことと折り合いをつけながら、進んでいかななくてはけません。そうすると、理論化が非常に難しくなります。

国家主義と戦った池田先生

これは先ほど教えていただいたのですが、2007年に人間学科ができる際、創立者が三つの指針を示されました。1番目が「生命の尊厳の探究者たれ！」、2番目が「人類を結ぶ世界市民たれ！」、3番目が「人間主義の勝利の指導者たれ！」ですね。この3つの指針は、非常に重要だと私は思います。どうしてでしょうか。みなさんの多くは信仰を持っています。あるいは、信仰を持っていないと言う人もいるかもしれませんが、しかし、全く信仰をもっていない人は世の中には一人もいません。どうしてかと言うと、人間は合理性だけで割り切れる存在ではないからです。

世の中で一番簡単な宗教は何かと言うと、それは「拝金教」、お金を追いかけていくという宗教です。そして、お金は権力と代替可能なので、お金を追いかける人というのは、出世競争の中で「出世」のことや「競争」のことが見えなくなります。これも実は宗教です。もう少し別の宗教では、「国

家主義」という宗教があります。「国家主義」というものを池田先生は『池田大作名言百選』（中央公論新社、2010年）の中で次のようにはっきりと書いています（p.119）。

国家主義というのは、一種の宗教である。誤れる宗教である。国のために人間がいるのではない。人間のために、人間が国を作ったのだ。これを逆さまにした“転倒の宗教”が国家信仰である。

我々は国家から逃れて生きていくことはできません。国家というものがどういうものなのかについて勉強してみたい人たちに薦めるのは、アーネスト・ゲルナーの『民族とナショナリズム』（加藤節監訳、岩波書店、2000年）という本です。少し難しいですが、読み応えがありますし、絶対に役に立つので覚えておいてください。アーネスト・ゲルナーはイギリスの社会人類学者です。ちなみに、今「社会人類学」と言いましたが、アメリカでは「文化人類学」と呼びます。ドイツやロシアでは「民族学」と呼ぶ。同じ学問ですが、呼び方が少しずつ違っていています。名前が違うということは概念も少し違う。ですから、みなさんも名前が違っていている場合は、その中身もチェックする習慣をつけるといいでしょう。

『民族とナショナリズム』の原著は *Nations and Nationalism* (Cornell University Press, 1983) という本で、イギリスの Blackwell という本屋からペーパーバックが出ています。これは非常に難しい英語で書かれていますが、訳本と合わせながら勉強すると、みなさんが外国に留学するときにも役に立つはずですよ。

脇道に逸れますが、TOEIC という試験がありますよね。率直に言うと、みなさんはあまり TOEIC を勉強しなくて構わないと思います。TOEIC は日本の経産省（元通産省）の役人たちが日本人向けに作成した英語試験です。ですから、日本のビジネスパーソンがとりあえずアメリカや東南アジアで仕事をする場合には役に立ちます。TOEFL はアメリカの大学に留学するために必要ですね。ところが、今は TOEFL を持ってもイギリスには行けなくなってしまいましたよね。TOEFL はコンピューターで番号を押していく形

の試験です。大学のセンター入試のような形式と言えばいいでしょうか。そのTOEFLで不正をした人がいたことが発覚したので、イギリスはTOEFLを一切受け入れなくなってしまったのです。イギリスは全く別のIELTSという試験を実施しています。これは日本ではあまり知られていません。英語検定協会がブリティッシュ・カウンシルとともに実施しているのですが、採点者が十分に確保できないために宣伝をしても処理できないのです。しかし、このIELTSのスコアを持っているとアメリカでも通用します。言うなれば、世界最強の英語試験なのです。IELTSには二つのフォーマットがあり、1つはアカデミック・モジュール、これは、例えばみなさんが平和学をイギリスで勉強する際に必要になる試験です。もう1つはジェネラル・トレーニング・モジュールというフォーマットがあります。これは、労働者としてイギリスやオーストラリアに行く場合などに必要な試験です。メイドさんや工場労働者として外国人が入国する際に必要な試験ですから、難しい単語は入っていません。それでも、文法はしっかりしています。加えて、筆記試験があります。ですから、コンピューターによる択一式では実施できないのですね。このあたりが、イギリス人の発想の面白さです。将来、様々なところへ行きたいのであれば、時間のある今の内に、このIELTSを受験しておくとても非常に良いと思います。

さて、国家というものを考えた場合の細かい点は、ここではお話ししません。ですが、『地球時代の哲学』の最後（おわりに、pp.296-300）や、今年（2014年7月）の『中央公論』に書いた創立者の話をしましょう。それは、「大阪事件における池田大作氏の戦い」というタイトルです。大阪事件については、お母さんやお父さんに聞けば教えてくれると思います。それから、創価学会の公式ウェブサイトに詳細が掲載されているので、勉強していただきたい。

1957年当時、参議院選挙大阪地方区補欠選挙で、一部の学会員の人が選挙違反を犯しました。池田先生はその件に全く関係していませんでしたが、大阪地検は池田先生が個別訪問やタバコによる買収を指示したという形にでっちあげをして、池田先生を逮捕したのです。そこで重要なのが、池田先生は

供述調書に「自分が指示しました」とも解釈できるような事実と違うことを書いたことです。これに対して一部の人たちは、「池田大作は警察権力と戦っていないじゃないか」という言い方をしますが、大きな間違いです。これは、捕まった人にしかわからないと思います。

強大な国家権力の前に、その相手と対等に戦うということは不可能です。いや、池田先生の精神力・忍耐力を持ってすれば、一切黙秘して何の調書も作らないということもできたでしょう。あるいは、完全な否認調書を作ることも可能だったのではないのでしょうか。しかし、池田先生には本質を捉える類い稀な才能がありますから、検察の本当の狙いが何かをわかっていました。それは、急に力をつけてきた創価学会を何としても潰す、ということです。もしも池田先生が否認したり供述を拒否したりしたならば、戸田城聖会長を逮捕する。それが本当の狙いでした。

私が12年前に東京拘置所に入ったとき、夏の昼に食パンの差し入れがあると、夕方の7時には少し青カビが生えてきました。翌朝の起床時間の7時にはカビのボールになっているのです。それに赤カビまで生えている。部屋の温度は40度に近くなり、脱水による死者が出ないように特別に昼に飲み物が支給されます。それに加えて、朝、昼、晩と1.5リットルずつ柳のお茶が配られます。何の香りもしないお茶です。脱水による死者をこれで防ぐわけですね。冬は暖房がないので、本当に震え上がります。気温が5度を下回ると歯がカチカチと鳴ってくるのです。しかし、看守と仲良くしていると南側の房に入れてもらえます。南側は比較的暖かいが、北側は本当に辛い。それから、夏は逆に南側が本当に辛い。我々は未決なので、冬場は普通にコート of 差し入れなどがもらえました。ところが、拘置所の中には雑役をする懲役囚がいます。その懲役囚はコートを着ることができません。私たちは手袋を買うことができるし、100円カイロだって買えます。しかし、懲役囚はそれができない。だからみな、手をあかぎれで真っ赤にしながらブルブル震えているのです。

池田先生が獄中に入った頃は、今よりもさらに厳しい状態でした。そうし

た状況で、糖尿病が悪化していて体調の良くない戸田先生が逮捕されることになる、戸田先生は獄中死してしまったでしょう。牧口先生を獄中で殺し、戸田先生も獄中で殺そうとしている。これが国家権力の意図なのだとこのことを池田先生は見抜きました。ですから、戸田先生と会員を守らなければならないと考えて、一見自白したようでギリギリでひっくり返せるような調書を書く知恵の戦いをしたのです。私も起訴されて有罪判決を受けましたが、刑事裁判というのは99.9%有罪になります。その中で無罪を勝ち取りました。「私にしかできない戦いだ」と後になって池田先生は述べていますが、まさにこのような戦い方が創価学会らしい戦い方だと私は思います。創価大学の卒業生でも司法試験に合格して検察官や裁判官、あるいは弁護士になっている人はたくさんいますね。なぜでしょうか？私は大阪事件の教訓だと思います。

普通の宗教団体であれば、「国家権力けしからん！」で終わってしまうでしょう。創価学会はそうではありません。人間には良い人間も悪い人間もいます。ですから、検察や裁判所の中に、きちんとした人間主義の価値観を持った人を送っていくことができるようになれば、この国は内側から変わっていくのだ、という考え方を創価学会は持っています。その考え方が創価大学の学生たちに以心伝心し、試験勉強を乗り越えていくことができるのだと思います。どうして、創価大学は資格試験に強いのですか？公務員試験や、あるいは公認会計士試験、司法試験、外務省専門職員採用試験に強いのでしょうか。もちろん、自分のキャリアや出世の事も大切です。しかし、それだけではありません。池田先生のためにがんばりたいと、みんなが思っているからではないですか。それが重要な勉強の動機になるのです。創立者が正しい価値観を持っている、ここが重要なのです。

イエス・キリストという名前とキリスト教は結びついていますよね。日本の仏教を見てみましょう。法相宗、あるいは天台宗や浄土宗、浄土真宗を親鸞宗であるとか法然宗といった言い方はしません。個別の名前と結びつかない、ドクトリン（教義）が優先される形の宗教と、真理は人格の中に体现し

ているのだという理由から人の名前と結びつく形の宗教。宗教には、こういった2つの傾向があると私は考えています。キリスト教は名前と結びつく宗教であり、創価学会も同じです。私の理解では日蓮仏法の延長を引きつつ、池田大作先生の名前の中に創価学会の真理が全て体现されている。ですから、池田先生を揶揄されたり、池田先生の悪口を言われたりすると、みんなが自分の事よりも悲しくなりますし、自分のことよりも怒りが湧いてくるのです。池田先生という名の中に、創価学会員のみなさんが信じている仏法の真理があると思います。

私は『地球時代の哲学』の中で、こういった結論を付けました (pp.291-292)。

池田氏は柔軟であるが、確固たる信念をかなり若い時期に確立している。キリスト教神学の言葉を用いるならば、この信念は神に呼ばれた召命(ドイツ語の Beruf, 英語の Calling)と親和的だ。仏教は神の存在を認めない。筆者はプロテスタント教徒で仏教については外部からの観察者であるので適切な言葉を見いだすことができないが、あえてこの場で率直な認識を述べることにする。池田氏は悟りを得たという点では仏であるが、すべての衆生を救うためにわれわれの世界にとどまっている菩薩なのである。20～21世紀に、池田氏は、救済宗教であるという仏教の本質を復興させた偉大な宗教改革者だ。これがプロテスタント神学徒である筆者の池田大作氏に対する率直な認識である。宗教は異なるが、筆者は1人の宗教人として池田大作先生を心の底から尊敬している。

これが、今日私がこの講義で伝えたかった一番大事なメッセージなのです。

平和主義の精神を守り抜いた公明党

それから今、新聞を取って読んでいる人、手を挙げてください。(学生たち挙手) おお、結構いますね。インターネットでニュースなどを定期的に見ている人は？(学生たち挙手) はい、ありがとう。となると、集团的自衛権の問題がありますよね。肩身が狭くはありませんか、今？(学生たち苦笑)

ただ、これは間違いないです。実は、今回の論戦では、公明党が勝っています。公明新聞を読んでいますか？7月2日の公明新聞、ここに1日の山口代表の記者会見の要旨が出ています。一番のポイントとなるのが、「安保法制懇の報告書に対し、公明党は、政府が長年取ってきた憲法解釈を基本に慎重な対応を求めてきた。これに対して首相は、議論の方向性を示すに当たり、政府の憲法解釈と論理的整合性を取ることが重要だとの考えを示した」、この後の部分です。これは本当にプロ中のプロにしか、なぜ重要なのかは分からないでしょう。「個別的吗集团的かを問わず自衛のための武力行使は禁じられていないという考え方や、国連の集団安全保障処置など国際法上合法的な措置に憲法上の制約は及ばないという考え方を採用しなかった」これが、今回の一番のポイントです。

まず、後者について、国際法と国内法の考え方については3つあります。1つ目の考え方は、国内法優位の一元論。これは、国際法と国内法の意見が矛盾している場合、国内法が重要ということです。日本国憲法は平和を定めていますから、国連憲章よりもそちらの方が重要であるという考えを主張しています。ということは、国内法重視の一元論なのですが、これは必ずしもリベラルな考えではありません。なぜなら、ナチスドイツもそうだったからです。ナチスの「血の純潔法」だとか、このような法律が国際法よりも優先されるという国内法優位の一元論というのは、国家のエゴイズムに偏りやすい。そうすると、次に出てくるのが二元論、つまり国際法と国内法は全く別物だという考え方です。例えば、北朝鮮は国際人権規約に加盟しています。ところが、北朝鮮の国内での人権問題は深刻ですよ。北朝鮮からしてみれば、「国内は国内、国際は国際で全く別だ」という発想なのです。3番目は国際法重視の一元論。民主的な国において、条約というのは民主的に選ばれた議会の同意を得て締結されますから、もし国内法との矛盾があるのなら、それについて調整を行うべきだという考え方です。仮に、矛盾が明らかになるのであれば、国際的な約束を優先させるということです。とはいえ、アカデミズムにおいては国際法重視、優位の一元論が優勢です。そこを使うと、「国

連憲章上で、あの国は悪いことをやっているから軍隊を出して行くべきだ」という考えは外務官僚の考え方です。

ところが、日本政府としてはそういった考え方は取らないということで、山口さんは「取りませんね」と首相に言って「取らない」という言質を取った。もっとも、内閣から出ている Q&A では「出動する場合もある」という答えになっています。これから、この点が公明党と自民党の間で一番の問題になるでしょう。あともう一つは「個別的吗集团的かは問わず自衛のための武力行使を禁じられていない」という考え方です。これはどういうことかと言いますと、今までの戦争というのは国家、もしくは交戦団体（ゲリラのようなもの。ある国の政権を転覆させる行動をとる団体。かつての南ベトナムの解放戦線など）を国際法の主体としていました。今日に至ってはイラクとシリアの一部を実効支配している「イスラム国」であるとか、アルカイダというものとは国境を越えて攻撃してきます。このような脅威に対して、個別自衛権であるとか集団自衛権であるとかの形で対応できるのかという問題があります。あるいは、サイバー戦です。みなさんの中にもコンピューターに強い人がいるでしょう？ 仮に、日中でサイバー戦が始まったとすると、日本政府と中国政府が戦争終結を宣言したとしても、中国のボランティアにコンピューターを持っている人がいれば、日本の防衛省にいくらでもサイバー攻撃をしかけることができます。日本でもハッカーが中国軍にサイバー攻撃をしかけることができます。国家の行為でなく個人の行為であっても、国家に大変な打撃を与えることができるのです。

こういった脅威に対してどのように対応するか。そこで、「集団自衛権では対応できない、個別自衛権では対応できない、だから自衛権を一本にしよう」という議論が出てくるのです。ただ、その議論の背景に何があるかと言えば、とにかく軍隊を出したいという気持ちです。山口さんはすべて承知した上で、暴走に傾く危険のあるところには、一つ一つに蓋をして押さえ、がんじがらめにしているのです。山口さんは「外国の防衛それ自体を目的とする、いわゆる集団自衛権は、今後とも認めない。憲法上、許される自衛

の措置は自国防衛のみに限られる。いわば個別的自衛権に匹敵するような事態にのみ発動されるとの憲法上の歯止めをかけ、憲法の規範性を確保した」と、こう言っています。

これに対し朝日新聞は「苦しい言い訳だ」と批判しています。しかしこの批判は間違っています。なぜなら、これまで日本政府の決定したことでも国際法的に見れば集団的自衛権と捉えられることがあるからです。これは「苦しい言い訳だ」と書いている朝日新聞の記者がいかにも国際法、外交の現実がわかっていないかということを証明しています。どういうことかと言うと、インド洋の給油で自衛隊が出動していますよね。あるいは、サモアやイラクにも、後方支援で自衛隊を送りました。日本政府は個別的自衛権だとしていますが、国際社会は集団的自衛権だと認識していますよ。このような、国際法的、国内法的な見方の違いはよくある話です。ですから、今回の集団的自衛権の問題というのは、むしろ以前よりも縛りをかけて、戦争への危険性を少なくしたという点では完全に公明党の勝利なのです。

その根っこにあるのは、平和主義という創価学会の考え方です。これはその価値観を共有している公明党が頑張ったという結果です。ここで問題なのが、マスコミによるプロパガンダでしょう。それから、安倍さんは合意したこの文書のことは何とも思っていない。率直に言いますと、安倍さんにとって集団的自衛権とはお祖父さまの思いなのです。要するに、岸信介元総理が1960年に新安保条約を作るときに、アメリカに守ってもらうだけではなく、日本からも軍隊を派遣したかった。双務性を担保して対等になりたかったのです。しかしそれはできませんでした。ですから、集団的自衛権が現実になれば、軍隊を派遣することが可能となり、祖父の霊を慰めることができます。これは、彼の心の問題なのです。つまりは、集団的自衛権という言葉が入ったならば、そこに言霊が宿り、そこから発展していくという発想なのでしょう。

そうすると、これは深いところで宗教と関わってきます。池田・トインビー対談『二十一世紀への対話』の中でも池田先生が1箇所だけ、トインビー博

士と激しく論争するところがあります。それは、国家神道に関するところです。池田先生はこう言っています（聖教ワイド文庫〔下〕 pp.147-148）。

神道は、たしかに、自然のあらゆる存在に尊厳性を認める思考から生まれた宗教です。しかし、なにゆえに尊厳であるのかということになると、神道はそれを裏づける哲学的体系に欠けています。その根底にあるものは、祖先が慣れ親しんできた自然への愛着心です。これは祖先を媒体とした自然崇拜と言えるでしょう。したがって、神道にはきわめてナショナリスティックな一面があるわけです。そして、この神道イデオロギーの端的なあらわれが、いわゆる神国思想なるものでした。この神国思想は、周知のように、きわめて独善的なものです。こうしてみると、神道の場合、自然に対する融和性はその一面にすぎず、その裏面に、他民族にたいする閉鎖性や排他性をもっているわけです。

池田先生の言葉のほうが絶対的に正しいでしょう。現実と池田先生の言葉がズレているときには、現実の方が間違っています。それを正しい方向に近づけていくことが、私が見ているところ、きちんとした信仰に基づいた創価の理念の継承者であるみなさんだと思います。そうすると、存在論的平和、自分が今いる場所においてどのように平和を実現していくのかということを一所懸命に実践する。私には創価学会や公明党のみなさんが取り組んでいることはこのように見えます。

ですから、公明新聞のインタビューで「平和の看板が傷つくという批判に対してどう思われますか」という質問に対して、私はこう答えました。「傷ついたって構わないではないですか。それで実際に平和が維持され、戦争が阻止されるのならば、看板なんてボロボロになってもいいではないですか。それが公明党らしさだと、私は思いますよ」と。

みなさんには日本の将来を担うとともに、創価の理念というものを日本の中で活かして行っていただきたいし、世界で活かしていただきたい。そうすると、私のような六師外道のキリスト教の世界の人間もまた、自分たちの信念で行動していますが、きっと良い対話ができますし、切磋琢磨できるので

はないかと思います。

〔質疑応答〕

マスコミの役割

男子学生 A 本日は貴重なお話をありがとうございました。この講演の中にも何度かマスコミについてのお話が出てきたと思いますが、自分は将来、マスコミ関係の仕事に就きたいと考えています。ただ、今のマスコミの現状を見たときに、やはり世論を偏った方向に誘導し、断片的な情報しか流さないというような側面が顕著に表れていると感じています。そこで、本来マスコミはどのような役割を果たすべきなのか、ということについて佐藤さんはどのようにお考えでしょうか？

佐藤 マスコミ志望というのは、具体的にどういう媒体か決めていますか？ テレビだとか新聞とか、雑誌とか。

男子学生 A 自分は今のところ出版関係に行きたいと思っています。

佐藤 出版関係となると、週刊誌に回される可能性もありますね（笑）。マスコミというのは媒体であるということだけに意味があります。あえて、少々タブーの問題に踏み込みましょう。

いわゆる言論出版妨害問題というのがありましたね。この後、私は創価学会が委縮しすぎていると思います。もう一度、当時の問題を第三者的につき放して見てみましょう。創価学会に対するきちんとした取材をせずに、侮蔑や誹謗中傷の内容の本が出るわけですね。そういった本が出たら、学会員さんが悲しみます。特に婦人部の高齢の女性たちが悲しむではないですか。そういった学会員さんが悲しむ顔を池田先生は見たくないと思ったのですね。ですから、そういった出版物は出さないでほしいと働きかけたのです。別に権力で規制するのは違いますから全然かまわないことではないです

か。

ところが、当時の世の中は創価学会が急に力をつけてきて、みんなそれに対する嫉妬と偏見を持っていました。ですから、わけがわからないようなバッシングになっていった。それだから、政教分離なのだとして強く主張したわけです。

しかし、政教分離という概念も新聞読んだだけでは全然わかりません。これは、インターネットで調べればわかると思いますが、新党大地所属の鈴木宗男さんの娘である鈴木貴子さんという人が国会できちんと質問を出しています。

飯島発言という暴言がありました。「政教分離を見直さなければならない」というものです。それに対して、政府の考えはどうなんだという質問を閣議にかけた。その答えには、安倍さんの名前で「政教分離とは、国が宗教団体に介入すること、宗教行事を行うことを禁止したもので宗教団体の政治活動を禁止したものではない」ということがはっきりと書かれています。これはきちんと報道されないので、私が東京新聞に書いて、それが明日出ます。「創価学会」とは一言も書いていませんけれどね。

つまり、政教分離というのは、宗教団体が政治に関して何か発言することを禁止してないのです。それがマスコミの中では、ある意味で創価学会に関して悪口が書き放題ということになった。自民党にしても、現在、公明党と連立を組んでいるけれども、創価学会を単なる集票マシンのような団体だと見ている議員がまったくいないとは言えません。

実際のごときは、お父さん、お母さん、おじいちゃんやおばあちゃんを見ていればわかるでしょう。要するに、選挙の前になって、お腹の中では「電話出ないほうがいいな」などと思いながら電話をかけて、小学校や中学校の卒業名簿を持ってきて「友達無くすんじゃないかな」と思いながらも、一生懸命に選挙運動やっているわけです。それは、政治を通じることで、少しでも人間主義的な良い世の中ができてくると信じているからだと思います。ですから、私は創価学会の支持で公明党が成り立っている、そこには創価学会

の宗教的な価値観があるということをもっと表に出しても問題ないのではないかと思います。むしろ、その宗教性を表に出したほうが、公明党がまったく政教分離違反とは違うというイメージで捉えられていいと、私は思うのです。

それから、創価学会についての話をする人の中で、非常にその点をしっかりと見ていると思うのが、田原総一郎さんです。田原総一郎さんに会ったときに、彼はコピーをくれました。それは『中央公論』での池田先生と田原さんとのインタビューでした。要約すると、政教分離という点では組織として別々に活動しているということです。「王仏冥合」という考え方は一貫している、それは現在も一貫していると池田先生はおっしゃっている。すなわち、仏法に基づいた正しい思想を持っているならば、それが政治にも自ずから反映してくる。これは当たり前のことです。ですから、今回の創価学会の広報から声明が出ましたね。これによって、集団的自衛権の問題について、政府の今までの解釈を尊重し、慎重に議論して集団的自衛権に踏み込むのであれば、憲法改正が必要だと宗教団体の立場から言うということも当たり前のことなのです。それによって、激震が走りましたが、これは政教分離原則の違反とは全然関係がなく、宗教団体として本来の活動をしているだけです。むしろ、それに対して「支持母体の言うがままじゃないでしょ」と石破さんが言ったりだとか、あるいは飯島さんの「政教分離について考え直さなきゃいけないな」という、このような発言が権力者から出てきたりする事のほうが、よほど問題だと私は思います。

では、マスコミにいったい何ができるかという、これはできる範囲は限られています。それは、存在論的な形で良い記事を書いて、良い書き手を見つけていき、そのようなことを少しでも多くの読者へと伝えていく、このようなことの積み重ねです。ですから、学生時代にはいろんな本をよく読んで欲しい。特に小説です。小説というのは近代と結び付いたものですから、文学全集を読破するくらいの勢いで本を読んで、読書量を増やしておくということが、将来出版社に勤めて編集者になるときに非常に役に立つと思います。

人生のターニングポイントと自身の信仰

男子学生 B いつも、BLOGOS や THE HUFFINGTON POST にて佐藤さんの著述をよく読ませていただいております。昨夜も「インテリジェンスの教室」を読み返しております、有料会員になろうかどうか悩んでしまいました（笑）。現在、佐藤さんは著名な著述家として活躍されていますが、今のご自身を形成する基になった人生のターニングポイントがありましたら、教えていただけませんか。また、創価学会のことを非常によく理解されていますが、そのことと実際に創価学会の信仰を持つということとの間にはどのような違いがあるとお考えでしょうか。

佐藤 まず、後者の方が重要な質問ですね。私が外からの応援者でとどまっている理由は、やはりキリスト教が親の宗教だからです。母親の宗教がキリスト教でしたから、その刷り込みからなかなか抜けられません。さらに言うと、人間というのは最初に触れた世界観型のものの見方、考え方から離れられないのではないかと私は思っています。ですから創価学会で言うと、二世とか三世そろそろ四世も出てくると思いますが、最初は親の気持ちを付度して一生懸命に頑張る、そのうちに反発する、そして、また戻ってきたときには本物になっていると、横から観察していると大体そういったパターンが見えてきますね（笑）。一回くらいは反発しないと駄目なわけです。

それから、様々な方から相談を受けることがあります。例えば、学会員の彼女と結婚したいけれども、親が許してくれないといったことです。そういったときに、私は「それはアンタの親が間違っているから説得しろ」と言います。「創価学会のどこが間違っているのか具体的に聞け」と。それを私に持ってきて、その答えでもって「キリスト教の人が反論をこういう風に言った」と親に伝えればいいからと。ですから、外にいる人は外にいる人で使い道はあると思います（笑）。

それから、人生のターニングポイントというのは幾つかありますが、やは

り私の場合は、同志社の神学部に行ったことです。ここにも出身者の人がいると思いますが、私は埼玉県で育って、浦和高校という男子校の出身です。この浦和高校というところは、400人いる内の300人くらいは東京大学を受けます。合格するのは50人くらいですけどね。それから、今でもクラスの半分は医者か歯医者か弁護士か役人です。そのような学校ですから、霞ヶ関を圧縮したような場所でした。私には浦和高校の体質が非常に合わなかった。ですので、学校の先生になりたいなと思っていましたが、もっと根源的な事を知りたいなと考えて、「神様はいないんだ」という無神論について研究しようと思いました。そうすると、当時の日本の大学で本格的な無神論を勉強できるのが、同志社の神学部しかなかったのです。同志社の神学部というところは、学生に洗礼は求めていません。諸外国の例ですと、神学部の学生の半分くらいは無神論者ですからね。

そうして、同志社の神学部に入ってみると、いわゆる成績とは別のところの本当に優れた友達と会えました。加えて、学者として戦時下の抵抗を潜り抜けた先生がいて、当時はドイツやアメリカで博士号を取っている人は少数でしたが、きちんと博士号を取った立派な先生たちがいました。それに私がいた当時は学年40人くらいしか人がいませんでした。そのうち、いつも学校に来るのは4、5人でした。学校に出てくる人は、大学院まで合わせて30人もいないのです。先生は17人いるんですけどね。ですから、非常に濃密な空間で師弟関係をもって教育を受けました。

結局はその後の人生で起きている事というのは、同志社の大学と大学院での6年間でやった事の反復なんです。「なんか、あそこでやった事とどこか似てる」ということがよくあります。ですから、ターニングポイントと言えるのは、同志社での6年間ですね。

それから、創価学会は一度入っても退会届や退会の規定がありますよね。民主的、近代的なんです。キリスト教には除籍(破門)はありますが、脱会というものがありません。ですから、入れ墨と同じで、一回入れると取れないということになっています。そのあたりは非常に非民主的で不自由な組織

なので、一回入ったら出るとことはできないんです。

ロシア文学とロシア語学

女子学生 A 佐藤さんはこれまで、たくさんの文学書を読まれてきたと思います。ロシア文学の中で一番好きな著者と著作名を教えてくださいませんか。

佐藤 ロシア文学というと、すぐにトルストイとかドストエフスキーとかが出てくると思いますが、私はソビエト文学のショーロホフという作家の短編で、『人間の運命』という作品が好きです。これは今だと角川文庫で出ていて、数年前の角川の文庫フェアの折に活字を改訂したのですが、私が解説を書いています。これは非常にいい作品です。

あなたはロシア語を専攻しているんですか？

女子学生 A はい。

佐藤 今、週何時間ですか？

女子学生 A 週6時間です。

佐藤 週6時間やっていると、本当にロシア語の基礎が付くからいいと思います。今、何年生ですか？

女子学生 A 今は一年生です。

佐藤 今、ロシア語はどこまで進んでいますか？

女子学生 A 未来形や与格のあたりです。

佐藤 わかりました。その後に、動詞の「体」というのが出てきて、それから運動の動詞というのも出てきます。この運動の動詞というのは面倒くさいです。また、みんなが諦めてしまうのが、形動詞・副動詞というところです。これは二年生で出てくると思いますが、二年生で諦めてしまう人が結構います。この形動詞・副動詞をきちんと使えると、ロシアのインテリに尊敬されます(笑)。それから、少し余計なことかもしれませんが、留学の機会多いですね？

女子学生 A はい。

佐藤 でしたら、絶対に異性と一緒に住むようになったりだとか、異性を使ってそこからロシア語を覚えたりしないようにしてください。どうしてかと言いますと、ロシア語は女言葉と男言葉とで、かなり違うからです。特に過去形になると全部女性形で話す男や、過去形になると全部男性形になる女性は、どうやってロシア語を覚えてきたかというのがすぐにわかってしまいますからね（爆笑）。

ですから、ガールフレンドやボーイフレンドと一緒にロシア語を勉強するという人は、ある程度の基礎文法が終わってからボーイフレンド、ガールフレンドを作ってください。気をつけないと、ロシア語は一生その癖がついてしまいます。外務省でも時々、女言葉で話す人がいるんです（爆笑）。そういう特質がロシア語にはあります。ですから現地の異性の友達を使うと語学力が伸びるというのは、語学によりけりで、ロシア語についてはお薦めしません。

池田先生の著作との出会い

男子学生 C 貴重な話ありがとうございました。いつごろから創立者池田先生の著作に触れられたのですか？

佐藤 池田先生の著作に最初に触れたのは、高校生の時です。当時、文庫化され始めていた『人間革命』（全12巻、聖教新聞社、1965～1993）を読んで面白いなと思いました。私はあれこれと色んな本を読んでいましたし、それに当時は『人間革命』はベストセラーのトップですからね（笑）。ですから、ベストセラー著書には必ず手を出すということですね。母親には叱られた記憶がありますが。

男子学生 C 一番インスピレーションを受けた著作は何ですか？

佐藤 私が一番インスピレーションを受けたのは、語録・箴言集ですけれども、やはり『池田大作名言百選』ですね。池田先生は多くの著作を書かれて

いるでしょう？それから、『人間革命』も『池田大作全集』144巻以降でしょうか。それらは二版になっていますよね。これは宗門との関係において、初版のままだと誤解を招く部分があると考えて、編集委員会が池田先生の方に宗門に関する記述を改めていただけないかと言ったら、池田先生は「みんなが望むならば」として了承してくれたからです。これを一部の学会ウォッチャーだとか、学会批判者たちは改ざんだと言うのですが、大きな間違いです。『人間革命』は創価学会にとっての聖書でしょうか？それから正しい歴史であり、同時に正しい信仰に導いていくものですよね。単なる小説ではない。生きている文章、生きている信仰の書は、常に改版・改訂されて、いかにして基督教の言葉であれば宣教に、みなさんの言葉であれば広宣流布に役に立つようになるのかと考えられて変わっていきます。基督教でも、去年に『ネストレーアランド第28版』という28回目のギリシャ語の聖書の改訂が行われました。これは十数年ぶりの出来事です。ですから、日本語の聖書も全て直されます。結構、肯定と否定が逆になるということがあるわけです。それから、聖書の中で、パウロの文章だとされたものが、本当にパウロが書いたものなのかどうか分からないことや、明らかに書いていないもの、明らかに後世に挿入したものだということが今の研究でかなりはっきりしてきました。それに対してきちんと整理するために、聖書は常に編纂作業が繰り返されているわけです。

今、創価学会の月刊機関誌『大白蓮華』で「池田大作指導選集」という新しい選集が連載されていますね。これを私は非常に注目しています。こういう風に生きている宗教ですから、現在の段階から池田先生の著作のどの部分をどのように読んでいくのかという考え方が重要なんですね。そういう意味で、今まででまとまった形のものですと、比較的短いですが『池田大作名言百選』という本が、池田先生の考え方や、創価学会の内在的な論理を知る上で、のたいへんな導きの糸になるのではないかと考えています。

政治の本質と平和を守る根源の力

男子学生 D 集団的自衛権の話が出たと思います。政治には無関心だったのですが、私も今回の件をきっかけにもっと日本の政治を見ていかないといけないなと思っています。その中で、主に日本政治の本質をしっかりと理解するためには、どのようなことが大事なのかを疑問に思っているのです、佐藤さんにお伺いしたいなと思います。

佐藤 やはり、何冊か基本的な良い本を読んでみることでですね。京極純一という東京大学の先生が書いた東大の教科書で『日本の政治』（東京大学出版会、1983年）という本があります。今はもう絶版になってしまいましたが、これは逆に言えば Amazon.com で1円で買える……1円ということは258円ということですね（笑）。『日本の政治』は宗教の側面に相当に踏み込んで政治を分析しているので、創大生が勉強するには良い本だと思います。

ちなみにこの京極純一という人は、『潮』にも時々出ている法政大学の山口二郎さんの恩師筋に当たる人です。京極純一さん自身はプロテスタントのクリスチャンですが、植村正久についての本などを書いています。力と力の関係であるとか、選挙情勢分析だとかいう位相ではなくて、「何が人間を突き動かすのか？」とか、人間の権力欲や増上慢であるとか、そういった点をも含めて書いていますので、良い教科書ではないかなと思います。

男子学生 E 先日の集団的自衛権問題では公明党が戦ってくれたので、安全だということはわかるんですけども、同時に不安を覚えました。実際に自分と家族を守るためには、私たちはどのような力を身に着けるべきだと思いますか。

佐藤 一番力を付けるには、やはり信仰が大事なのではないですか。創価学会員ならばお題目をきちんとあげて勤行をする。キリスト教徒なら聖書を読んで祈りをする、ということです。そうして、見えない世界が見えるきちんとした力を身に着けることが、結局は安全保障の一番の根源にあると思います。力で力を抑えていくという安全保障の理屈は簡単に勉強できます。半年

ほどあれば、安全保障の技術で通用する力を付けることができます。金融工学の技術には、数学の基礎力さえあれば1年で通用することができる。しかし、人間がどういう生き物か、人間の心の機微や心の襞（ひだ）、こういったことを分かるようになるには、5年経っても10年経ってもまだまだかかります。

それから、自分にとってのきちんとした足場——これは宗教でも構いませんし、特定の思想でもいいですが、しかし本物でないといけません——そこをきちんと持っていくところから、先から言うように存在論的な形で平和を維持することができるようになると思います。ですから、平和を維持すると言っても、自衛官の家庭と、あるいは大学教授の家庭、新聞配達員の家庭、農家の家庭、小さな町工場をやっている家庭、その労働者の家庭とで、一つ一つ置かれている状況が違ってくると、その家庭その人にとっての平和も違ってくるのです。ですから、実はこれは一般論として論じられない問題です。その一般論で論じられない問題の中での基礎体力をつけるためには、信仰の力が大切なのではないかと思っています。

学生一同 今日には本当にありがとうございました。

